事例報告

国産材・地域材利用による生物多様性配慮・環境コミュニケーション

コクヨ株式会社人事総務部 環境ユニット長 **齊藤　申一 氏**

皆さんこんにちは、コクヨの齊藤です。

今日は「国産材・地域材利用による生物多様性配慮・環境コミュニケーション」というテーマで講演依頼をいただきました。「結の森プロジェクト」という、私どもが2006年から立ち上げたプロジェクトがこのテーマにぴったりかな、と思いますので、その話をさせてもらいます。

その前にコクヨの歴史を少し紹介させていただきます。コクヨは1905年創業で、最初は黒田表紙店という社名で、表紙だけをつくっていた会社でした。「表紙」つまり、森林資源を利用して創業したことになります。

実は、コクヨは漢字で、国の誉れと書いて「国誉」なんです。「国」は富山県のことを指しています。富山の誉れになろうということで創業者が大阪に出てきました。

コクヨというと文房具のイメージが強いかと思いますが、実際は皆さん方が今お座りになっている椅子、机等のファニチャー事業、オフィス通販事業、リテール事業（ACTUS）もあります。今日はその中のファニチャー事業の話をさせてもらおうと思います。

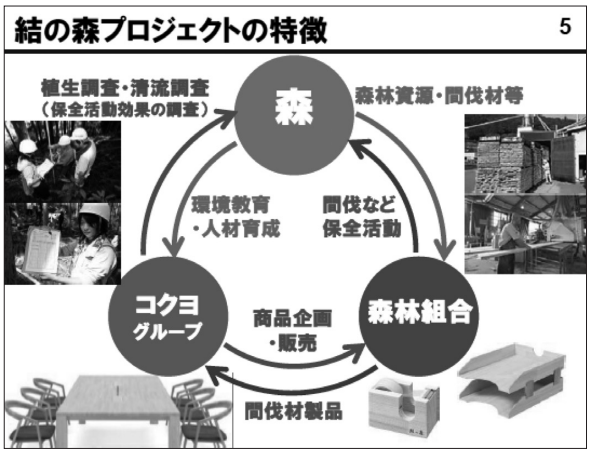
コクヨは統合認証という形態でISO140001を認証取得しており、7つの環境方針をかかげています。その中のひとつとして「生物多様性」があります。

本日の講演内容の「結の森プロジェクト」は、2006年10月、高知県の四万十町で環境と経済の好循環をテーマにスタートさせました。

今、日本の多くの森林の間伐が遅れていますが、間伐しても利用されない。利用されないから間伐が進まないという悪循環になっています。よって、単に間伐だけではなくその間伐材を利用することで好循環を目指そうとしたわけです。プロジェクトの特徴としては、森を中心に地元の森林組合と商品企画や販売、地元の高校生たちと一緒に間伐した効果を検証するためのモニタリング活動を実施しています。

活動の3本柱のひとつである森林管理は、高知県四万十町の公有林ではなく民有林が対象です。結の森はコクヨ所有ではありま

出所：登壇者講演資料



出所：登壇者講演資料

出所：登壇者講演資料

せん。コクヨはあくまで間伐の支援をしているに過ぎません。間伐した材を利用して、オフィス通販事業のカウネットで「結の森シリーズ」商品やファニチャー事業の間伐材家具を製造、販売しています。今日ご紹介するのはファニチャー事業の間伐材家具です。

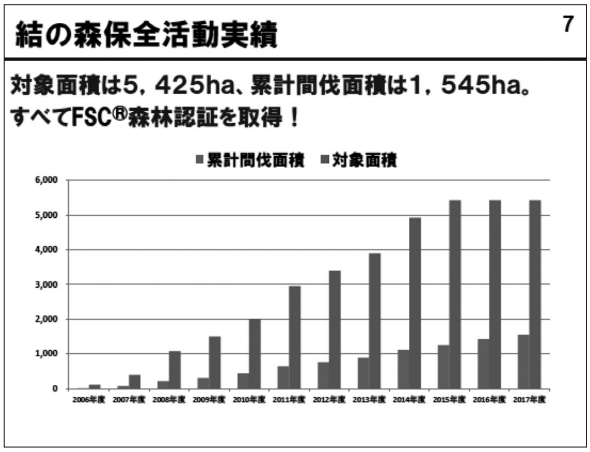
現在では森林保全の対象面積は5,425haにまで拡大しており、正直、私もどこからどこまでが結の森なのか分からないんです。その対象面積のうち、毎年約150haくらい間伐を実施しており、現在1,545haの間伐を終えています。すべてFSC®（Forest Stewardship Council®森林管理協議会）の森林管理認証を取得しています。

FSC®認証を取得することで木材にプレミアムがつき、高い価格で購入いただけるのではと期待しましたが、実際には、認証材のオーダーはあっても価格にははねかえってはいません。2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けていかに認証材需要が認知され価格が上がっていくかをひそかに期待しています。

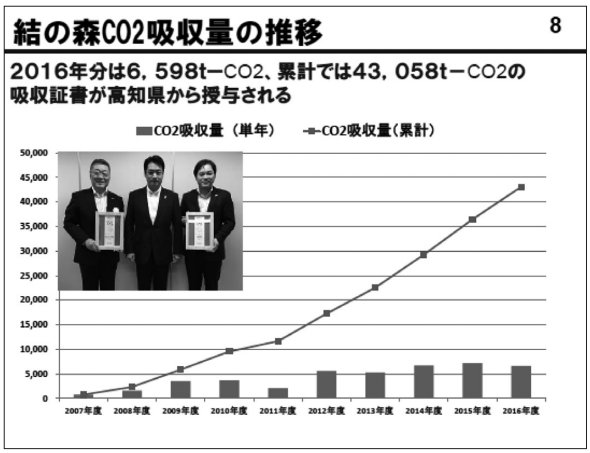
また、CO_2吸収量が結構な量になっています。毎年高知県から1年間のCO_2吸収量の証書をいただいております。2016年は6,598トンでしたが、コクヨグループは年間約4万3,000トンのCO_2を排出していますので、排出した分の約15%を吸収していることになり、それなりに貢献ができているかなと思っています。

また、生物多様性保全ということで、植生調査と四万十川の清流調査を高校生たちと一緒にやっています。

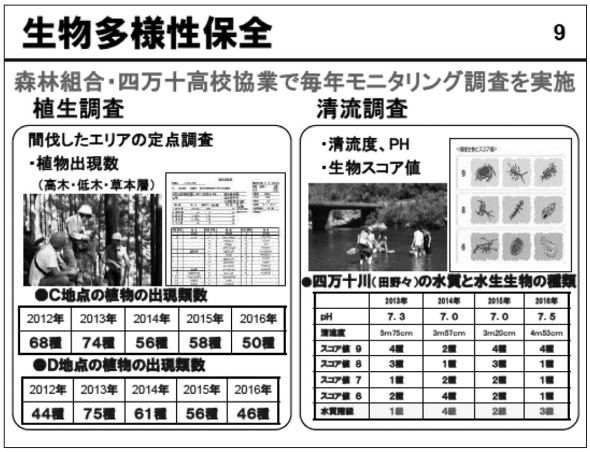
間伐材家具（事例）のスライドをご覧ください。「結の森プロジェクト」を始めたのは2006年ですが、スライドの上側の間伐材家具は2000年頃から既に発売しています。間伐材やその地域でとれる地域材を集成材の形にしてオフィス家具の脚部はそのまま、天板部分に地域材を使用する木金混合家具として2000年から発売しています。プロジェクトが始まった2006年以降、2009年に「FUBI」、2010年に「UUチェアー」というスライド下側の商品を発売しました。



出所：登壇者講演資料



出所：登壇者講演資料

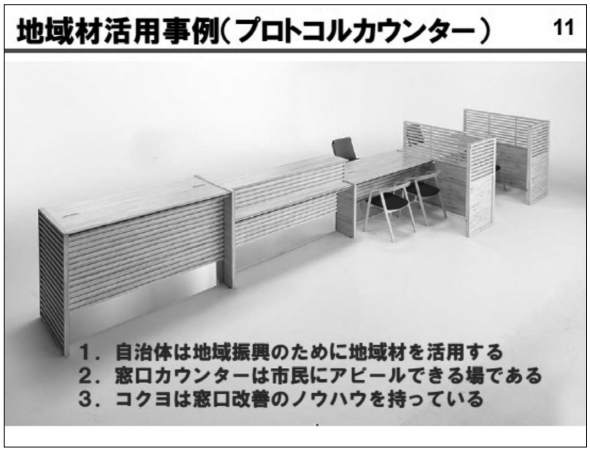


出所：登壇者講演資料

ただ、今までの商品群は、実際はそんなに量が出ないのが悩みの種でした。そうした中、自治体で庁舎の建替え案件が増えてきて、その窓口のカウンターに地域材を使うということで開発したのがこのプロトコルカウンターです。

庁舎ですから1回決まればそれなりの量が出ます。どこの地方自治体も森林の間伐が進まない、間伐しても利用されないという問題をこういう形で解決していこうと取り組みを強化しています。

出所：登壇者講演資料



出所：登壇者講演資料

第１号は地元の四万十町で全面的に採用されました。次に、東京都港区役所芝浦港南支所でここでは四万十町のヒノキ材を使いました。東京近辺の方はぜひ見に行ってみてください。

プロトコルカウンターは、年に２～４件ぐらいの庁舎で採用されています。今は官公庁案件ばかりですが、カウンターは別に庁舎だけの話ではないので、民間でも利用が増えることを期待しています。

ウッドデザイン賞を受賞しました。今回呼んでいただいたのもこの受賞がきっかけかなと思っています。結の森プロジェクトとプロトコルカウンターのダブル受賞でした。

出所：登壇者講演資料

ただ、良いことばかりではありません。納品後に商品が反る、傷つく、割れる、縮む。特にスギはヒノキと比べると強度が弱いので大変です。木材の品質維持はなかなか大変で、品質管理が大変な分、コストアップの要因となります。このように一喜一憂、日々苦労しながら取り組みを進めています。

私はマネジメントの立場なので開発には携わることは少ないので今日はファニチャー事業の人間もこの会場に来ています。自治体の皆さん、オーダーをお待ちしております。カタログもご用意していますので、よろしくお願いいたします。

ご清聴ありがとうございました。